

2025 年 9 月 14 日 説教「恐れなくて、伝え続けよ」

使徒の働き 18 章 1～11 節

本日は会堂 18 周年記念です。連続して学んでいるルカの福音書からではなく、使徒の働きから教えられていきます。今朝の聖書箇所は 2024 年 1 月 21 日に開いたところではありますが、改めてこの箇所から導きを与えられていきたいと思います。

1. コリント宣教開始 (1～4 節)

①コリント (1)「その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。」

コリントは、東西の海路、南北の陸路の結び目となる地でした。当然、通商、交通の要所でした。町は山裾にあり、アシュタロテという女神の神殿がありました。また、コリントは風紀の面では乱れていました。ローマの地方総督が駐在し、町は経済的にも繁栄しました。パウロがこの地に祈りつつ、期待と不安をもって入り宣教を開始したことでしょう。

②アクラとプリスキラ (2～3)「ここで、アクラというポント生まれのユダヤ人および妻プリスキラに出会った。クラウドオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命令したため、近ごろイタリアから来ていたのである。パウロはふたりのところに行き、自分も同業者であったので、その家に住んでいっしょに仕事をした。彼らの職業は天幕作りであった。」

アクラは黒海東南部沿いのポント出身でした。彼はユダヤ人で、妻はプリスキラといいました。彼らはイタリアのローマに住んでいましたが、クラウドオ帝が出したユダヤ人追放令(紀元 49 年)により、コリントにやって来ていたのです。彼らはキリスト教伝道の心を持つ夫妻でしたが、その生業として天幕作りをしていました。パウロは彼らと、天幕作りをしながら、共に宣教をするようになりました。

③会堂で論じ (4)「パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人とギリシャ人を承服させようとした。」

パウロは新しい宣教地に入ると、とっかかりとしてユダヤ人会堂に向かい、そこで(旧約)聖書を開きつつ、イエス・キリストを伝えていました。コリントにおいても安息日には、ユダヤ人会堂に行き、ユダヤ人には聖書から、ギリシャ人には哲学を話題にしつつキリストを伝えました。

2. 信ずる人々 (5～8 節)

①みことばに専念 (5)「そして、シラスとテモテがマケドニヤから下って来ると、パウロはみことばを教えることに専念し、イエスキリストであることを、ユダヤ人たちにはっきりと宣言した。」

パウロの弟子であり同労者であるシラスとテモテはしばらくマケドニヤのベレヤに留まっていた(17:14～15)。パウロは人をやって、アテネにくるようにと伝えてあったのですが、ようやくにして二人はコリントに辿り着きました。彼らが来ると、パウロはひとまず天幕作りの仕事はせずに、御言葉を伝えることに専念しました。そして、イエスがキリスト(救い主)

であることをユダヤ人達に宣言したのです。

- ②**暴言を吐くユダヤ人 (6) 「しかし、彼らが反抗して暴言を吐いたので、パウロは着物を振り払って、『あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけられ。私には責任がない。今から私は異邦人のほうへ行く』と言った。」**

パウロはよくユダヤ人会堂に入り、彼らにキリストの福音を説きました。しかし、彼らの中には、パウロの伝えるメッセージに反発し、暴言を吐く人々がいました。パウロは福音に耳を貸さない彼らに対し、決然と「あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけられ」と言い伝えました。つまり、語るべきことをユダヤ人達に語ったパウロは、キリストを受け入れない事の責任は本人にあると厳しく語り、異邦人伝道に力を注ぐと伝えたのです。

- ③**ユストとクリスポ (7～8) 「そして、そこを去って、神を敬うテテオ・ユストという人の家に行った。その家は会堂の隣であった。会堂管理者クリスポは、一家をあげて主を信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマ受けた。」**

ユダヤ教会堂の隣にある家にユストという人がいました。パウロを歓迎してくれました。また会堂管理者のクリスポの一家は、ユストの家か会堂かはわかりませんが、パウロから福音を聞き、揃ってキリストを信じました。さらに、多くの人々が主の前に出て、信仰告白をし、バプテスマ(洗礼)を受けたのでした。それは主の祝福でした。

3. コリントに腰を据え (9～11 節)

- ①**恐れずに語れ (9) 「ある夜、主は幻によってパウロに、『恐れないうで、語り続けなさい。黙ってはいけない。』」**

ある夜のことで、パウロに主が幻をよって語られました。「恐れずに語り続けよ。黙ってはいけない」。反対する者たちに屈してはならないということです。いかにパウロであっても、キリスト教に対して反感を持つ人々の攻撃に心が沈むことがあったでしょうが、恐れずに語り続けよ、という言葉は励みでした。

- ②**わたしの民が (10) 「『わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから』と言われた。」**

ご命令の理由は、i. 主が共にいてくださる、ii. 危害を加える者はない、iii. この町には主の民がたくさんいる、というものでした。確信に溢れた、コリントの地に主の民がまだたくさんいるというお言葉は励みでした。

- ③**一年半コリントに (11) 「そこでパウロは、一年半ここに腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。」**

パウロは伝道旅行において、一ヶ所には数か月滞在することが普通でした。しかし、彼は主の励ましをいただいたこともあって、コリントには一年半、腰を据えて御言葉のご奉仕を続けたのでした。

《結論》教会の祈禱会では現在、コリント人への手紙第一を学んでいて 12 章にまで至っています。この書は言うまでもなく、コリント教会に宛てられた手紙です。その教会には分派のこと、男女のこと、夫婦のこと、独身、結婚、離婚、供え物のこと、礼典、賜物、愛にいて、復活についてなど、実際生活、信仰生活の具体的問題などが語られています。それらのことについて、念入りに語られなければならないほどに、コリントの教会は様々な問題を有していました。

それは、コリントが交通の要所であり、貿易の要衝の地であったことにも関係があります。ローマ軍の兵士あり、ユダヤ人、フェニキヤ人、フルギヤ人、東方の民など様々な民、そして、軍人、学者、商人、船員などいろいろな種類の人々がそこにいました。宗教的にもミネルバ神殿、アシュタロテの神殿もありました。その地は、欲望が煮えたぎるような町でした。

キリストの福音がいったい受け入れられるのだろうかと思われる地でありました。今朝の聖書箇所にはそのような地に入って伝道を始めた使徒パウロに神の備えがあったことを示されています。天幕作りをしながら伝道を共にする、アクラとプリスキラとの出会いから始まり、その地の民への伝道へと進ませられたパウロはテテオ・ユストという信者に出会い、会堂管理者クリスポの一家は一家をあげて信じるに至りました。また多くの人々が福音を聞いて信じ、バプテスマを受けたのです。そのような恵みを宣教開始早々から与えられました。しかし、現実的には世の力に影響されている人々に、福音を届けるのには困難を覚えることがありました。

しかし、そんなパウロにある夜のことで与えられたのが次の御言葉でした。『恐れないうで、語り続けなさい。黙ってはいけない。』。ひるむことなく、福音を伝え続けよということです。さらに、『わたしはあなたと共にいる』という励みに富んだおことは、さらには、『誰も危害を加える者はない』と励ましが伝えられた上に、『この町には、わたしの民がたくさんいる』という力強い約束の言葉をいただいたのです。パウロはこのコリントの地に 1 年半という長期間いたわけですが、御言葉の促しどおり語り続けたのです。その結果について、詳しいところはわかりませんが、相当数の人々がクリスチャンになったと思われます。そうでなければ、コリント人への手紙が二つも書かれることはなかったでしょう。教会内で沢山の問題が生じるほどに、たくさんの人々がクリスチャンになったと考えられるからです。

私達の教会と当時のコリントの教会を同列に語ることはできませんが、宣教の原則は変わりません。『恐れないうで、語り続けなさい。』という御言葉は私たちにも通じます。否定的な状況を数え上げるよりは、恐れることなく、語り続けるのです。御言葉が語られる礼拝を続けることです。また、伝道者も信徒も主を証し続けるのです。福音を伝え続けるのです。それが使命であります。今朝は会堂 18 周年記念の日です。記念するということは語り続けることを決意することです。姉ヶ崎キリスト教会には、知恵も必要ですが、ためらわず、信じて、語り続けていく時に、知恵も与えられ、道は開かれていきます。姉ヶ崎キリスト教会は今後も、恐れず、語り続け、前進していきましょう。